opusdei.org

教皇フランシスコ、 2025年通常聖年公布 の大勅書「希望は欺 かない」

フランシスコ、ローマ司教、神のしもべたちのしもべ。この書簡を読む人々の心が、希望で満たされますように。

2024/09/04

希望は欺かない―2025年の通常聖年 公布の大勅書₁₁₁ フランシスコ、ローマ司教、神のし もべたちのしもべ。

この書簡を読む人々の心が、希望で満たされますように。

1 「希望はわたしたちを欺くことが ありません (Spes non confundit)」(ローマ5・5)。使徒 パウロは希望のしるしの名のもと に、ローマのキリスト者の共同体に 励ましを与えます。古来の伝統に 従って教皇が25年ごとに宣言する、 次の聖年の中心となるメッセージも 希望です。わたしは、聖年を過ごす ためにローマを訪れる人たちと、使 徒ペトロとパウロの町に行くことは かなわずとも部分教会において聖年 を祝う人たち、そうしたすべての希 望の巡礼者のことを思います。すべ ての人にとって聖年が、救いの 「門」である主イエス(ヨハネ10・

7、9参照)との、生き生きとした個人的な出会いの時となりますように。教会は、主イエスを「わたしたちの希望」(一テモテ1・1)として、いつでも、どこでも、すべての人にのべ伝える使命をもっています。

すべての人は希望を抱きます。明日 は何が起こるか分からないとはい え、希望はよいものへの願望と期待 として、一人ひとりの心の中に宿っ ています。けれども将来が予測でき ないことから、相反する思いを抱く こともあります。信頼から恐れへ、 平穏から落胆へ、確信から疑いへ 一。わたしたちはしばしば、失望し た人と出会います。自分に幸福をも たらしうるものなど何もないかのよ うに、懐疑的に、悲観的に将来を見 る人たちです。聖年が、すべての人 にとって、希望を取り戻す機会とな りますように。神のことばが、その 根拠を見つけるのを助けてくれま

す。使徒パウロがローマのキリスト 信者にあてて書いたものに案内して もらいましょう。

希望のことば

2 「わたしたちは信仰によって義と されたのだから、わたしたちの主イ エス・キリストによって神との間に 平和を得ており、このキリストのお かげで、今の恵みに信仰によって導 き入れられ、神の栄光にあずかる希 望を誇りにしています。……希望は わたしたちを欺くことがありませ ん。わたしたちに与えられた聖霊に よって、神の愛がわたしたちの心に 注がれているからです| (ローマ 5・1-2、5)。ここでパウロは、考 察すべき点を数多く示しています。 わたしたちは、ローマの信徒への手 紙は彼の宣教活動の中の決定的な段 階を記していることを知っていま す。それまで、彼はローマ帝国の東 部一帯で活動していましたが、いよ

いよローマが、世界の中でも特徴的 な意味をもつあの町が、彼を迎える のです。それは、障壁も境界も知ら ない福音を告げ知らせるため、立ち 向かうべき大いなる挑戦でした。 ローマの教会はパウロによって設立 されたのではありませんが、彼は一 刻も早くローマに赴きたいという強 い望みを抱いていました。それは、 死んで復活したイエス・キリストの 福音をすべての人にもたらすため、 すなわち、約束を実現し、栄光へと 導く、愛に基づいた欺くことのない 希望を告げるためでした。

3 希望はまさしく愛から生まれ、十字架上で刺し貫かれたイエスのみ心からわき出る愛がその根本です。

「敵であったときでさえ、御子の死によって神と和解させていただいたのであれば、和解させていただいた今は、御子のいのちによって救われるのはなおさらです」(ローマ5・10)。そのいのちは、洗礼とともに

始まるわたしたちの信仰生活の中に 現れ、神の恵みに素直にこたえる中 で育っていきます。そうして、聖霊 の働きによってたえず新たにされ、 揺るがないものとされる希望によっ て、いっそうの輝きを放つのです。

旅する教会とたえず歩みをともに し、信じる人々に希望の光を注いで くださるかたこそ聖霊です。聖霊 は、決して消えることのない松明の ように、わたしたちの人生に支えと 力を与える、希望の光をともし続け てくださいます。間違いなく、キリ スト者の希望は、裏切ることも欺く こともありません。なぜならそれ は、何事も何者も神の愛からわたし たちを引き離すことはできないとい う確信に根ざすものだからです。 「だれが、キリストの愛からわたし たちを引き離すことができましょ う。艱難か。苦しみか。迫害か。飢 えか。裸か。危険か。剣か。……し かし、これらすべてのことにおい

て、わたしたちは、わたしたちを愛 してくださるかたによって輝かしい 勝利を収めています。わたしは確信 しています。死も、いのちも、天使 も、支配するものも、現在のもの も、未来のものも、力あるものも、 高いところにいるものも、低いとこ ろにいるものも、他のどんな被造物 も、わたしたちの主キリスト・イエ スによって示された神の愛から、わ たしたちを引き離すことはできない のです」(ローマ8・35、 37-39)。ですからこの希望は、困 難によってくじかれることはありま せん。信仰に基づき、愛によって養 われるのです。希望のおかげで、人 牛を前に進むことができます。この ことについて聖アウグスティヌスは こう書いています。「どのような生 活のしかたであれ、信じ、希望し、 愛するという、魂の三つの性向なし に、人は生きることはできませんし

4 聖パウロはきわめて現実家です。 人生は喜びと苦しみが織りなすもの だということ、愛は問題が増すとき 試練に遭うということ、希望は苦し みの前ではついえそうになるものだ ということを知っています。それで もこう書いています。「(わたした ちは) 苦難をも誇りとします。わた したちは知っているのです、苦難は 忍耐を、忍耐は練達を、練達は希望 を生むということを | (ローマ5・ 3-4)。使徒パウロにすれば、艱難 と苦しみは、無理解と迫害の中で福 音をのべ伝える人にとって典型的な 条件なのです(ニコリント6・3-10 参照)。けれどもこのような状況に おいて、闇の中に光を見いだすので す。福音宣教が、キリストの十字架 と復活から生じる力によって、どれ ほど支えられているかが見えてくる のです。そこから、希望と密接に結 びついた徳、すなわち忍耐が鍛えら れていくのです。つねに慌ただしく あることが当たり前となった世界で

 れた「兄弟なる太陽の賛歌」の中 で、被造界を一つの大家族とみな し、太陽を「兄弟」、月を「姉妹」 と呼びましたほ。忍耐を再発見する ことは、自分にとっても他者にとっ ても、とてもよいことです。聖パウ 口は、神がわたしたちに約束してく ださったことに対する辛抱強さと信 頼の大切さを強調するために、何度 も忍耐の語を用いています。しかし 何よりも、神はわたしたちに対して 忍耐強くあられるかた、「忍耐と慰 めの神」(ローマ15・5参照)であ るとあかししています。聖霊の実で もある忍耐は、希望を生き生きと保 たせ、それを徳としても生き方とし ても強めてくれます。ですから、希 望の娘でありつつ、希望を支えてく れる忍耐の恵みをしばしば願い求め ることを学びましょう。

希望の道

5 このように希望と忍耐が影響し合 うことから、次のことが明らかにな ります。つまり、キリスト者の人生 は、目的地である主キリストとの出 会いを垣間見せてくれるかけがえの ない伴侶、すなわち希望を養い強め る絶好の機会をも必要とする旅路だ ということです。わたしは、紀元 1300年の最初の聖年の公布には、そ れに先立って、民間の霊性によって 鼓舞された恵みの道程があったとい うことに思いを馳せるのが好きで す。実際、ゆるしの恵みが神の忠実 な聖なる民に豊かに注がれる形態 は、さまざまであったということを 忘れるわけにはいきません。たとえ ば、教皇ボニファツィオ八世が聖年 を定める六年前の1294年8月28日と 29日に聖チェレスティノ五世教皇 が、アクイラのサンタ・マリア・ ディ・コレマッジョ大聖堂を訪れる 人々に与えることを望んだ大いなる 「ゆるし」が挙げられます。 つまり 教会はすでに、いつくしみという聖

年の恵みを経験していたのです。ま たそれ以前の1216年に教皇ホノリウ ス三世は、8月の1日と2日にポル ツィウンクラ聖堂(訳注:聖フラン シスコが修復し、活動の拠点とした 聖堂)を訪問した者に対する免償を 願い出た聖フランシスコの嘆願を受 け入れました。サンティアゴ・デ・ コンポステラへの巡礼についても同 じです。1122年、教皇カリスト二世 は、使徒ヤコブの祝日が主日と重な るたび、この巡礼所で聖年を祝うこ とを許可しました。聖年のこうした 「広がりをもった」祝い方が続くの はよいことです。それは、神のゆる しの力が、共同体と個々人の歩みを 支え、寄り添うことになるからで す。

巡礼が、聖年のすべての行事の基本 要素であることは偶然ではありませ ん。旅に出ることは、人生の意味を 探し求める人の特徴です。徒歩巡礼 は、沈黙、苦労、いちばん大切な物 事、それらの価値の再発見に大いに 有益です。来年も希望の巡礼者たち は、聖年の体験を充実させるため、 古くからの道や現代の道を歩んで行 くはずです。ローマ市内にも、カタ コンベへの道や七巡礼聖堂への道と いった伝統的な行程のほかに、信仰 の道が数々設けられます。国境が取 り払われたかのように一つの国から ほかの国へと渡り、目を凝らして自 然界や芸術作品を眺めつつ町から町 へと移動していくことによって、さ まざまな体験や文化が宝として、自 らの内に残る美となるでしょう。そ の美が祈りと調べを合わせると、な し遂げられた驚きのわざゆえの神へ の感謝へと至ります。巡礼路沿いや ローマ市内の聖年指定聖堂は、信仰 の道での英気を養い、希望の泉で喉 をうるおす、霊性のオアシスになる はずです。そのためにはまず、まこ との同心の歩みに欠かせない出発点 である、和解の秘跡を受けることで す。部分教会においては、司祭と信

徒がゆるしの秘跡に備え、個別にそれを受けやすくするよう、特別に配慮することが必要です。

この巡礼には、とりわけ東方教会の 信者を、なかでもペトロの後継者と の完全な交わりにあるかたがたを招 きたいと思っています。彼らは、キ リストと教会への忠実さゆえに、死 に至ることも少なくないほどの苦し みを味わっておられます。ですから ここローマに、特別に歓迎されてい ると感じるはずです。ローマは、彼 らにとっても母であり、彼らの存在 の多くの記録を大切にとどめている からです。東方の古代の典礼と、教 父、修道者、神学者の神学と霊性に よって豊かにされたカトリック教会 は、彼らとその正教会の兄弟姉妹へ の歓迎の気持ちを象徴的に表したい と思っています。彼らは、暴力や不 安定な情勢のため安全な土地へ向 かって、自分たちの土地を、自分た ちの聖なる地を離れざるをえず、す

でに十字架の道行という巡礼を体験 する時代にいます。彼らにとって、 彼らを見捨てることなく、どこへ行 こうともいつも寄り添ってくれる教 会に愛されているという体験は、聖 年のしるしをさらに強いものにする のです。

6 2025年の聖年は、これまでの恵み の行事の連なりの中にあります。前 回の通常聖年には、イエス・キリス トの生誕2000年の節目を越えまし た。それに続いて、2015年3月15日 にわたしは、すべての時代のすべて の人にとって福音の中心的メッセー ジである、神の「いつくしみのみ顔 | を明示し、すべての人がそのみ 顔と出会うことができるよう特別聖 年を宣言しました。そして今、新た な聖年の時が来ました。この聖年の 間に聖なる扉が再び大きく開かれ、 キリストにおける救いという確かな 希望を心に呼び起こす、神の愛の生 きた体験がもたらされます。さらに

この聖年は、すべてのキリスト者に とって根本的な、もう一つの記念に 向けた歩みになります。まさしく 2033年には、主イエスの受難と死と 復活によってなし遂げられた、あが ないの2000周年が祝われます。この ようにわたしたちの目前には、いく つものすばらしい過程を伴う道が広 がっています。どの過程にあって も、熱い信仰をもって歩み、愛のわ ざに励み、辛抱強く希望し続ける (一テサロニケ1・3参照) 民に対し て、神の恵みは先行し、かつ伴って いるのです。

この長い伝統に支えられ、この聖年は全教会にとって恵みと希望の濃い体験となるということを確信し、わたしはバチカンのサンピエトロ大聖堂の聖なる扉が、本2024年12月24日に開かれ、それをもって通常聖年の開始とすることを定めます。それに続く主日、つまり2024年12月29日には、わたしの司教座サン・ジョヴァ

ンニ・イン・ラテラノ大聖堂の聖なる扉を開きます。この聖堂は、今年11月9日に献堂1700周年を祝います。続いて2025年1月1日、神の母聖マリアの祭日には、教皇バジリカであるサンタ・マリア・マッジョーと大聖堂の聖なる扉が開かれます。るサン・パオロ・フォーリ・レ・カ大聖堂の聖なる扉が開かれます。この後者の三つの聖なる扉は、同年12月28日の主日に閉じられます。

また2024年12月29日の主日に、すべての司教座聖堂と共同司教座聖堂において、教区司教は聖年の荘厳な開幕として、感謝の祭儀を、その機会のために準備される儀式書に従っるとがるよう定めます。共同司教は、特別に指名された代理人に代わりに指名された代理人に代わりに指名された代理人に代わりにもらうことができます。巡礼行列の集合地に指定された教会堂を出発して、司教座聖堂に向かう巡礼行列

は、神のことばに照らされて信者た ちを一つにする、希望の道のしるし です。この行列の間に、本大勅書の 一部が読み上げられ、聖年の免償が 人々に告知されます。聖年の免償 は、部分教会での聖年を祝うための 儀式書に収められた規定に従って受 けることができます。部分教会で は、2025年12月28日の主日に閉幕す る聖年の間に、神の民が、神の恵み への希望の告知と、その告知の効果 を証明するしるしをも受け取るため に、全面的にそれらに協力すること ができるよう配慮する必要がありま す。

通常聖年は、2026年1月6日、主の公現の日に、バチカンの教皇バジリカ、サンピエトロ大聖堂の聖なる扉が閉じられることをもって閉幕します。キリスト者の希望の光が、すべての人に向けられた神の愛のメッセージとして、一人ひとりに届けられますように。教会が、世界のあら

ゆる場所でこの知らせを忠実にあか しすることができますように。

希望のしるし

7 わたしたちは、希望を神の恵みか らくみ取ることに加え、主がわたし たちに差し出す、時のしるしの中に も希望を再発見するよう招かれてい ます。第二バチカン公会議が断言し ています。「教会は、つねに時のし るしについて吟味し、福音の光のも とにそれを解明する義務を課されて いる。そうすることによって教会 は、現世と来世のいのちの意味、ま た両者の相互関係について人間が抱 く永久の疑問に対し、それぞれの世 代に適した方法をもってこたえるこ とができるであろう | 151。したがっ て、悪と暴力にはかなわないなどと 思い込む誘惑に陥らないよう、世に あるよいものすべてに注意を向ける 必要があります。まさしく、救って くださる神の現存を必要とする人間

の心の渇望を含んだ時のしるしは、 希望のしるしへと変えられることを 望んでいるのです。

8 希望の最初のしるしは、世界の平 和といいうるものです。世界は今ま た、戦争という惨劇に沈んでいま す。過去の惨事を忘れがちな人類 は、おびただしい人々が暴力の蛮行 によって虐げられるさまを目の当た りにする、新たな、そして困難な試 練にさらされています。この人たち に、どんな苦しみがさらに必要だと いうのでしょうか。助けを求める彼 らの必死の訴えが、諸国の責任者た ちを、世界規模の影響を認識し、あ まりに多い地域紛争を終わらせるこ とへと、どうして突き動かさないの でしょうか。武器が沈黙し、死や破 壊をもたらすことを終わりにさせる というのは、過大な夢なのでしょう か。聖年は、「平和を実現する人々 は、……神の子と呼ばれる」(マタ イ5・9) ということを思い起こさせ るはずです。平和の要請はすべての 人に強く訴え、具体的な計画の実施 を求めています。恒久的な平和を目 指して交渉する場を勇敢に創意を もって作るための、外交努力を欠く ことがあってはならないのです。

9 希望をもって将来を見ること一、 それは、伝える熱意にあふれた人生 観をもつことでもあります。残念な がら、こうした視点が多くの場合で 欠けていることを、悲しくも認めざ るをえません。その第一の結果が、 いのちを継承する意欲の喪失です。 目まぐるしい生活のペース、将来へ の不安、安定雇用や適切な社会保障 の欠如、丁寧なかかわりよりも利益 追求が俎上に載せられるような社会 モデル、それらの結果、憂慮すべき 出生率の低下が多くの国で生じてい るのです。逆に、異なる事情もあり ます。「一部の人々の過度で飽くな き消費主義を非難せず、人口増加を

非難することは、問題に向き合うことからの逃避です」[6]。

責任ある母性と父性をもっていのち へと開かれていることは、創造主が 男性と女性の心とからだに刻みつけ た計画です。それは、主が夫婦とそ の愛に託した使命です。国の法制化 の取り組みに加えて、信者の共同体 と市民社会の、その全構成員からの 確実な支援を得ることは急を要しま す。なぜなら、その愛の豊かな実り として新しい子をもうけたいという 若者たちの望みは、どの社会にも未 来を与えるものだからです。この望 みは、希望の問題なのです。希望に かかっているものであり、希望を生 み出すものだからです。

したがってキリスト者の共同体は、 希望のための社会同盟の必要性を支 持することにおいて、先頭に立たな ければなりません。包括的であって イデオロギー的ではない同盟、今や

世界の多くの地域で、たくさんの空 の揺りかごを満たすために、大勢の 幼児の笑顔あふれる未来に寄与する 同盟です。とにかく、だれもが実際 に、生きる喜びを取り戻す必要があ ります。人間は神にかたどり、神に 似せて造られたので(創世記1・26 参照)、ただ生きていくだけ、なん とかやっていくだけ、物理的な現実 に満足してよしとするだけ、そうし たことに甘んじてはいられないので す。そうなれば個人主義に閉じ込め られ、希望が蝕まれていきます。そ こから、心に巣くう悲嘆が生じ、さ さくれて、不寛容になるのです。

10 聖年の間にわたしたちは、苦しい境遇のもとで生きる大勢の兄弟姉妹にとっての、確かな希望のしるしとなるよう求められます。自由を奪われ、拘留されている人たちのことが心に浮かびます。日夜、隔離の過酷さに加えて、虚無感を味わい、制約を課せられ、さらには、敬意の欠如

がまかり通っているのです。この聖年に際して、希望を取り戻せる施策に着手するよう各国政府に提案いたします。たとえば、自信と社会的信頼の回復を促すための恩赦や刑の免除、法令遵守の実際的な誓約にかなった社会復帰のプログラムです。

これは聖書に由来する古来の勧告 で、やり直しができるようにする慈 悲と解放のわざを訴えることにおい て、あらゆる知恵の価値をそのまま に保っています。「この五十年目の 年を聖別し、全住民に解放の宣言を する」(レビ25・10)。このモーセ の律法の定めを、預言者イザヤは繰 り返します。「主は……わたしを遣 わし(た。)貧しい人によい知らせ を伝えさせるために。打ち砕かれた 心を包み、捕らわれ人には自由を、 つながれている人には解放を告知さ せるために。主が恵みをお与えにな る年……を告知(させるために) | $(7 + 7 + 61 \cdot 1 - 2)$ 。 $2 \cdot 7 \cdot 1 - 2$

は、イエスがその盲教活動の初め に、「主の恵みの年」がご自分にお いて実現したことを宣言して、ご自 身のものとされたことばです(ルカ 4・18-19参照)。地球の至るとこ ろで、信者、とくに司牧者は、嘆願 の代弁者とならなければなりませ ん。受刑者の人権を尊重した尊厳あ る待遇、そして何よりも死刑の廃止 を、声を一つにし勇気をもって訴え るのです。死刑は、ゆるしと更生の 希望をすべて無にする、キリスト教 信仰に反する措置ですが。投獄され ている人々に寄り添う具体的なしる しを示すために、わたし自身が、ど こかの刑務所で聖なる扉を開きたい と思います。それを、希望と人生へ の新たな決意をもって、未来を見る よう招くしるしとしたいのです。

11 希望のしるしは、自宅療養か入院中かを問わず、病者にも差し出されなければなりません。彼らの苦しみは、見舞いに訪れる人たちの寄り添

いや思いやりによって和らげられる でしょう。慈善のわざは、心に感謝 の念を呼び覚ます希望のわざでもあります。その感謝の思いが、すべで の医療従事者に届きますように。彼 らは、大抵は困難な条件のもと、病 者やもっとも脆弱な人たちへの行き 届いたケアによって、その使命を果 たしています。

とくに苦しい生活環境に置かれていて、自身の無力さを味わっている人への、包括的なケアを欠いてはなりません。病気あるいは障害を抱え、介助がなければ自由に動けないが求らに対しては、とりわけそれが求められます。彼らへのケアは、人間の尊厳への賛歌であり、社会全体の調和ある行動を求める希望の歌です。

12 その存在自体が希望である若者 も、希望のしるしを必要としていま す。残念ながら、若者の夢がついえ ることも多々あります。彼らを失望

させるわけにはいきません。未来は 彼らの情熱にかかっているのです。 たとえば、腕まくりして、災害や社 会の危機的状況に自発的に取り組ん でいるときなど、活力あふれる彼ら を見るのはうれしいことです。しか し希望のない若者を見るのは悲しい ものです。とはいえ、先行きが不透 明で夢を抱けないならば、学業に よって道が開かれないならば、仕事 にあぶれ十分に安定した職を得られ ず、望みを捨ててしまうならば、憂 鬱と倦怠の中で今を過ごすことにな るのも致し方ないことです。薬物に よる幻覚、犯罪すれすれのこと、束 の間の享楽、こうした行為が、ほか の人に対して以上に彼ら自身に混乱 を来し、生きることのすばらしさと 意味とを見えなくして、暗黒の深淵 へと突き落とし、自己破壊的な行動 に走らせるのです。ですから、聖年 は教会の中で、若者を奮起させる機 会となるべきです。新たな熱意で、 青少年を、学生を、恋人たちを、若

い世代を心にかけることです。若者 に寄り添うこと、それは教会と世界 の喜びであり希望なのです。

13 自分自身と家族のために、よりよ い生活を求めて故郷を去る移住者に とっての希望のしるしも欠いてはな りません。偏見や排斥によって、彼 らの期待がくじかれることがありま せんように。一人ひとりをその尊厳 ゆえに喜んで迎えることには、だれ もが望ましい未来を築く権利を奪わ れないようにする、責任が伴いま す。国際的な緊張状態によって、戦 争、暴力、差別を避けるには逃げる しかない多くの亡命者、強制移住 者、難民には、安全、就労、教育の 機会を保障すべきです。それらは、 新しい社会環境に溶け込むために必 要な手立てなのです。

キリスト者の共同体にはつねに、 もっとも弱い立場の人々の権利を守 る用意がなければなりません。より よい生活への希望をだれ一人奪われることのなう、広い心で歓待の扉を開け放ってください。最後のでまたとえの重要なたとえのもたまのかことばが、わたしいかられた。要された。からは、からは、からは、からは、からは、からしてのもっとしてあるこのは、わたしにしてあることなのである」(マタイ25・35、40)。

14 高齢者は、孤独を感じたり見捨てられたと思ったりすることが多く、希望のしるしを受けるにふさわしうかたがたです。彼らの存在という宝、彼らの人生経験、彼らがきるいる知恵、差し出すことは、世代いる知恵なりの協働に招かれて可能の連携のための協働に招かれている、キリスト者の共同体にとっても責務です。

わたしは、若い世代に信仰と人生の 知恵を伝達する者の代表である祖父 母の皆さんのことを思っています。 子からの感謝と孫からの愛によっ て、彼らが支えを得ますように。子 や孫は、彼らに自分のルーツを見い だし、理解と励ましを得るのです。

15 わたしは、最低限の生活必需品に もしばしば事欠く、数十億を超える 貧しい人々にとっての希望をせつに 祈ります。次々と押し寄せる貧困化 の波を前にすれば、それに慣れてし まったり、あきらめたりしかねませ ん。しかし、世界の特定の地域だけ でなく、今や至るところに見られる 痛ましい状況から目をそらすことは できません。わたしたちは毎日、貧 しい人や困窮する人と巡り合いま す。場合によっては、近所の人がそ うかもしれません。住むところがな い人も、その日の十分な食事にあり つけない人も珍しくありません。多 くの人から除け者にされ、その無関

心な態度に苦しんでいます。言語道 断な事実があります。莫大な資金が あり、その大部分が軍備費に充てら れる世界にあって、貧しい人が「多 数であり、何十億人にも上るので す。今日、政治や経済に関する国際 的な議論の中で、彼らについて言及 されはしますが、単なる副次的被害 として取り扱われるか、そうでなけ れば、そうした問題は、ほとんど義 務としてよそよそしく付け足される だけという印象がしばしばです。つ まるところ、具体的な取り組みは、 しばしば一番下に積み置かれるので す | เซเ。忘れてはいけません。貧し い人々は、ほとんどいつも犠牲者で あって、非難されるべき人たちでは ありません。

希望を求める訴え

16 預言者たちのいにしえのことばを響かせて、聖年は、地上の財は限られた特権的な人たちのためではな

く、すべての人のためにあるという ことを思い起こさせます。富を所有 している人は寛大でなければなら ず、自分の兄弟である困窮者たちの 顔に目を向けなければなりません。 わたしはとくに、水と食べ物に事欠 く人々のことを考えています。飢え は、わたしたち人類というからだが 負った恥ずべき傷であり、一人ひと りの良心を揺さぶります。わたしは 今一度訴えます。「武器やその他軍 事費に使われているお金で、国際基 金を設立しようではありませんか。 飢餓撲滅のために、そして最貧国の 発展のために、そうして、その国の 住民が暴力的解決や空振りの解決策 に頼らなくてよいように、より尊厳 ある生活を求めて国を離れる必要が ないようにです | [9]。

聖年に向け、もう一つの心からの願いをお伝えしたいと思います。富裕国に向けてです。下してきた数々の決定の重大性を認識し、およそ返済

が不可能な国の債務を免除する決断 をしてください。それは、寛大さで ある以上に正義の問題です。わたし たちが気づきつつある新しいかたち の不公平によって、今日いっそう深 刻化している問題です。「真の意味 での「エコロジカルな債務」が存在 し、なかでも世界の南北間における それは大きく、環境に影響する貿易 の不均衡や、ある国々によって長期 間行われてきた天然資源の過度の使 用につながっていますしてい。聖書が 教えているように、大地は神に属し ており、わたしたちは皆、そこに 「寄留し、滞在する者」(レビ25・ 23) として生きているのです。わた したちが、世界に平和への道を準備 したいと真に望むなら、不正義の根 本的な原因を正すよう尽力し、不公 正で返済不能な債務を帳消しにし、 飢えている人々の空腹を満たすこと です。

17 来る聖年の間には、すべてのキリ スト信者にとって非常に重要な記念 日を迎えます。まさしく最初の重大 な公会議、ニケア公会議の開催から 千七百年になります。使徒時代以 来、司教たちは教義と規律に関する 諸問題を取り扱うため、さまざまな 機会に集いをもっていたことを思い 起こすのは時官を得ています。最初 期の信仰の数世紀の間、西方におい ても東方においても教会会議(シノ ドス)が繰り返され、神の民の一致 と福音の忠実な告知とを守り抜くこ とがいかに重要であるかが示されま した。今日のキリスト教共同体が、 福音化の急務によりふさわしく対応 するためにますます必要な表現だと 自覚する、シノダリティ(ともに歩 むこと)の姿を具体化するため、聖 年は大事な機会となるでしょう。洗 礼を受けたすべての人は、おのおの 自分のたまもの(カリスマ)と役務 をもち、希望の多様なしるしが世界

に神の現存をあかしするよう、連帯 責任を負っているのです。

ニケア公会議の使命は、イエス・キ リストの神性および御父との同質性 の否定によって、重大な脅威にさら されていた一致を守ることでした。 325年5月20日、コンスタンティヌス 帝の招集を受けた、およそ300人の 司教たちが宮廷に参集しました。さ まざまな議論の末、聖霊の恵みによ り、わたしたちが今日主日の感謝の 祭儀で唱えている信条について意見 の一致を見ました。公会議教父たち はこの信条を、初めて用いることと なった「わたしたちは信じます | m という表現をもって始めることを望 みました。それは、この「わたした ち において、すべての教会が交わ りの中にあり、すべてのキリスト信 者が同じ一つの信仰を告白するとい うことをあかしするためです。

ニケア公会議は、教会の歴史におけ る一里塚です。その開催の記念日 は、キリスト信者たちを、聖三位へ の、とりわけイエス・キリスト―神 の御子、「御父と同一本質」「121、愛 のこの神秘をわたしたちに明かして くださったかた一への替美と感謝の うちに一つになるよう招くもので す。そしてニケア公会議は、諸教会 すべてと全教会共同体に対する招き ともなっています。目に見える一致 へ向かって歩み続けなさい、イエス の祈りに完全にこたえるにふさわし い姿を倦まず求め続けなさい、との 招きです。「父よ、あなたがわたし の内におられ、わたしがあなたの内 にいるように、すべての人を一つに してください。彼らもわたしたちの 内にいるようにしてください。そう すれば、世は、あなたがわたしをお 遣わしになったことを、信じるよう になります」(ヨハネ17・21)。

ニケア公会議では、復活祭の日付に ついての議論もありました。これに ついては、今日でも立場の違いがあ り、信仰の十台となる出来事を同じ 日に祝うことの妨げとなっていま す。摂理的な事情により、その機会 がまさに2025年に訪れます(訳注: 2025年の復活祭は、西方でも東方で も4月20日になる)。これが、東方 と西方のすべてのキリスト信者への 呼びかけとなり、復活祭を共通の日 とする一致に向かう決定的な一歩を 踏み出すよう期待します。心得てお くとよいと思いますが、多くの人は 過去の論争をもはや知りませんし、 この問題について、なぜ分裂が続い ているのかを理解していないので す。

希望に錨を下ろして

18 希望は、信仰と愛とともに、キリスト者の生き方の本質を表す三つの「対神徳」をなしています(一コリ

ント13・13、一テサロニケ1・3参 照)。不可分なそれらのダイナミズ ムの中にあって、希望は、信仰者の 生き方の方向と目的を示す、いわば 指南役です。ですから使徒パウロ は、次のように招いています。「希 望をもって喜び、苦難を耐え忍び、 たゆまず祈りなさい」(ローマ12・ 12)。そうです。わたしたちは「希 望に満ちあふれている」(ローマ 15・13参照) べきです。それは、わ たしたちが心に抱く信仰と愛を、説 得力をもって魅力的にあかしするた めです。そうすれば、信仰は心弾む ものとなり、愛は歓喜となります。 またそうすれば、一人ひとりが ちょっとしたほほえみ、親しみのし ぐさ、兄弟としてのまなざし、真摯 な傾聴、無償の奉仕を、受ける人々 にとってそれがイエスの霊において 豊かな希望の種となることを感じつ つ差し出すことになります。しか し、わたしたちの希望の基になるも のは何でしょうか。それを理解する

ため、わたしたちの希望についての 説明(一ペトロ3・15参照)に注目 してみましょう。

19 「わたしは永遠のいのちを信じま すしい。わたしたちはこう信仰告白 しますし、キリスト者の希望はこの ことばを根本的な基盤としていま す。希望はまさしく「対神徳です。 この希望の徳によってわたしたち は、……わたしたちに幸せをもたら してくれる……永遠のいのちを待ち 望みます」[14]。第二バチカン公会議 は、こう断言しています。「神とい う基礎と永遠のいのちに対する希望 が欠けるとき、今日しばしば見られ るように、人間の尊厳はひどく傷つ けられ、生と死、罪と苦しみの謎は 解けないままであり、その結果、絶 望に陥る人も少なくないしい。けれ どもわたしたちは、自分を救ってく れた希望のおかげで、過ぎ去る時を 見て、人類の歴史と一人ひとりの人 生は、行き止まりや暗黒の深淵に向

かっているのではなく、栄光のされることに向かって進んですることに向かって進んです。でという確信を得ています。つく立め、主のの再臨を待ち望みつう。このではなりましょう。くるというなどをもるのではない。「主がない」(黙示録22・20)。

れ、その後12人に現れたことですし (ーコリント15・3−5)。キリスト は、死んで、墓に葬られ、復活し、 出現した一。このかたは、わたした ちのために死の惨劇を経たのです。 御父の愛が、聖霊の力によってこの かたを復活させ、その人性をわたし たちの救いのための永遠の初穂とさ れました。キリスト者の希望は、ま さにここにあります。つまり、すべ てが終わると思われる死を前にわた したちは、キリストのおかげで、洗 礼のときに授けられた恵みによっ て、「いのちは取り上げられるので はなく、変容されるのです | 「1561、永 遠に、という確信を与えられていま す。まさしく洗礼においてキリスト とともに葬られたわたしたちは、復 活したキリストのうちに、新しいい のちのたまものを授かります。その いのちは、死の壁を破り、永遠へと 向かう通路となるのです。

最愛の人と引き離される、つらい別 れである「死」を前にしては、どん なことばも意味をなしません。です が聖年は、その惨劇を変容すること のできる、洗礼で授かった新たない のちのたまものを、深い感謝の心を もって再発見する機会を与えてくれ るでしょう。聖年の文脈で、信仰の 最初の数世紀以来、この神秘がどの ように理解されたかをあらためて考 えることは大切です。たとえば長い 間、キリスト信者は洗礼槽を八角形 に造ってきました。今日でも、ロー マのサン・ジョヴァンニ・イン・ラ テラノにあるような、八角形の古い 洗礼堂の数々を見ることができま す。このことは、洗礼の泉において 八日目、すなわち復活の日が始まる ことを示しています。八日目は、七 日ごとに巡る通常の周期を超越する 日で、これによって永遠の次元、永 遠のいのちへと開かれます。これこ そ、わたしたちが地上の旅路で目指 すものです(ローマ6・22参照)。

キリスト教のさまざまな伝統に属するこの殉教者たちは、一致のための種子でもあります。彼らは血のエキュメニズム(教会一致)を体現しているからです。そのためわたしは、聖年の間に必ずエキュメニカルな祭儀を行い、彼ら殉教者のあかしの豊かさをはっきり示したいと強く願っています。

21 では、わたしたちは死後どうなる のでしょうか。この境界を越えた先 に、イエスとともにある、永遠のい のちがあります。それは、神との完 全な交わりに、神の限りない愛を観 想しそれに参与するところにあるの です。わたしたちが今希望のうちに 味わうものを、そのときには実際に 目にするでしょう。聖アウグスティ ヌスはこれについてこう書いていま す。「わたしのすべてをささげてあ なたに結ばれるとき、何の悲しみも 苦しみもなくなることでしょう。そ のとき、わたしの生はまったくあな たに満たされ、真に生ける者となる ことでしょう | ෦ඁ෩。ではこの完全な 交わりにはどんな特徴があるでしょ うか。それは、幸せであるという事 実です。幸福は人間存在の召命であ り、すべての人にとっての目標で す。

ですが、幸福とは何でしょうか。わたしたちはどんな幸福を期待し、望

んでいるのでしょうか。刹那的な喜 びでもなければ、かりそめの満足で もありません。そうしたものは、一 度手に入れても、貪欲の渦の中でま すます要求し、そのような中で人間 の魂が満たされることは決してな く、ますますむなしくなるのです。 わたしたちは、自分を開花させるも の、すなわち愛において決定的に達 成される幸福を必要としています。 ですから、今すでにこういえるので す。「わたしは愛されています、だ からわたしは存在するのです。そし て、わたしは欺くことのない愛であ るかたにおいて永遠に存在し、何で あっても、だれであっても、そこか らわたしを引き離すことはできませ ん」。ここでもう一度、使徒パウロ のことばを思い起こしましょう。 |わたしは確信しています。死も、 いのちも、天使も、支配するもの も、現在のものも、未来のものも、 力あるものも、高いところにいるも のも、低いところにいるものも、他

のどんな被造物も、わたしたちの主キリスト・イエスによって示された神の愛から、わたしたちを引き離すことはできないのです」(ローマ8・38-39)。

22 永遠のいのちと結びついたもう-つの現実は、わたしたちの生の終わ りと、世の終わりとにある、神の審 判です。芸術は繰り返しこれを表現 しようとしてきました。システィー ナ礼拝堂のミケランジェロの傑作を 思い浮かべたらいいでしょう。当時 の神学の概念を用いて、観る人に畏 敬の感覚を伝えています。人生を総 括するときに備え、十分な自覚を もって真剣に準備するのは正しいこ とですから、その間には、つねに対 神徳である希望の次元で備えるべき です。希望は、活力を与え、不安に 負けないようにしてくれます。愛で ある神(一ヨハネ4・8、16参照)の 審判は愛に基づくもので、とくに、 もっとも貧しい人一裁きを行うその

かた、キリストがそこにおられるの です一に対してどれだけの愛を実践 したか、しなかったかのみに基づい て下されるものです(マタイ25・ 31-46参照)。ですからそれは、人 間の裁き、地上の裁判所の裁きとは 異なります。神のあわれみのはかり しれない神秘における、愛である神 との、そして自分自身との真実のか かわりとして理解されるべきです。 これに関して、聖書にはこう書かれ ています。「神に従う人は人間への 愛をもつべきことを、あなたはこれ らのわざを通してみ民に教えられ た。こうしてみ民に希望を抱かせ、 罪からの回心をお与えになっ た。……(わたしたちは)裁かれる とき、あわれみに依り頼む」(知恵 12・19、22)。教皇ベネディクト十 六世も書いておられるとおりです。 「審判のとき、わたしたちは、世と わたしたちの中にあるすべての悪に 打ち勝つキリストの愛の力を経験 し、受け入れます。愛の苦しみはわ

たしたちの救いと喜びになります」

したがって審判は、わたしたちが希 望している救い、そしてイエスがそ の死と復活によってわたしたちのた めに獲得してくださった救いとかか わっています。ですからそれは、主 との決定的な出会いに向かわせるも のです。そのような状況では、犯し た悪が隠されたままであるとは考え られませんから、それは、神の愛へ と決定的に過ぎ越せるよう、清めら れなければなりません。この意味 で、地上の生涯を終えた人々のため に祈る必要性を理解することができ ます。その祈りは、聖徒の交わり、 すなわち、すべての造られたものに 先立って生まれたかた、キリストに おいてわたしたちを一つに結び合わ せるきずなから効力を得ながら、連 帯して行う執り成しの祈りです。こ のように聖年の免償は、祈りの力に よって、わたしたちより先に召され

た人々が満ち足りたあわれみにあず かれるよう、特別な方法で彼らのた めにも意図されているのです。

23 まさしく免償は、神のあわれみがいかに無限であるかを分からせてくれます。古代において、「あわれみ(misericordia)」ということばは、「免償(indulgentia)」ということばと互換性のあるものだったのは偶然ではありません。なぜなら、まさに「免償」は、限界を知らない神のゆるしの十全さを表そうとするものだからです。

ゆるしの秘跡は、神がわたしたちの 罪を消し去ってくださることを確約 しています。慰めの力に満ちた詩編 のことばが思い起こされます。「 はお前の罪をことごとくゆるし、ら なすべていやし、いのちを墓からよ がない出してくださる。いい とあわれみの冠を授けてく、恵みに る。……主はあわれみ深く、恵みに

富み、忍耐強く、いつくしみは大き い。……主はわたしたちを罪に応じ てあしらわれることなく、わたした ちの悪に従って報いられることもな い。天が地を超えて高いように、い つくしみは主をおそれる人を超えて 大きい。東が西から遠いほど、わた したちの背きの罪を遠ざけてくださ る | (詩編103・3-4、8、 10-12)。秘跡による和解は、霊的 機会であるだけでなく、それぞれの 信仰の歩みにおける、決定的で本質 的、かつ不可欠な一歩です。そこに おいて、主はわたしたちの罪を滅ぼ し、わたしたちの心をいやし、わた したちを起き上がらせて抱きしめ、 その優しくいつくしみに満ちたみ顔 を示してくださるのです。主によっ て和解させていただき(ニコリント 5・20参照)、そのゆるしを深く味 わうことこそ、神を知るいちばんの 方法です。告白を放棄せずに、いや しと喜びの秘跡のすばらしさ、罪の

ゆるしのすばらしさを再発見しま しょう。

しかしながら、個人的経験で知って いるように、罪は「痕跡を残し」、 結果を伴います。罪は、犯した悪の 結果として外に影響を与えるだけで なく、内にも影響を及ぼします。と いうのも「小罪も含めたすべての罪 は被告物へのよこしまな愛着を起こ させます。人はこの愛着から、この 世であるいは死後、清められなけれ ばなりません。死後の清めの状態は 煉獄と呼ばれますしばる。したがっ て、悪に引き寄せられる弱いわたし たちの人間性には、「罪の残滓」が とどまるのです。これらは免償に よって、どんな場合もキリストの恵 みのおかげで、取り除かれます。聖 パウロ六世教皇が書いておられるよ うに、キリストは「わたしたちの免 償 | [20]だからです。聖年の免償を得 て、それを有効なものとするための

諸規定を、教皇庁内赦院は公布しま す。

このようにゆるしで満たされた体では、ゆるしては、ゆるすこと、心を思すといいますといいますといいます。といいますといいます。といいまないは、しまをでしまが、増悪を主にいるでは、しまをでは、はもまではももでは、違うととではいるといるといるというでは、違うというにはもまれるようにはもまれるようには、違いというにはもまれるの目りにない。

前回の特別聖年のときに、わたしは、重大な使命を果たし続ける、いつくしみの宣教者を立てました。次の聖年でも、彼らにはその任務を遂行してほしいのです。罪を犯した人が、開かれた心と悔い改めへの思いをもって自分のもとを訪れたなら、

そのたびに希望を取り戻させ、ゆる しを与えるという任務です。彼らに は和解の道具であり続け、御父のあ われみからもたらされる心からの希 望をもって未来を見る、助けであっ てほしいのです。司教たちには、と くに希望が厳しい試練にさらされる 場所、たとえば刑務所や病院、人間 の尊厳が踏みにじられている場所 へ、またきわめて貧しい状況のもと へ、すさんだ環境下へと彼らを派遣 し、その尊い奉什を生かしてくださ るようせつに願っています。だれ一 人として、神のゆるしと慰めを受け る可能性を奪われることがないため にです。

24 神の母は、希望のもっとも偉大なあかし人です。このかたを見ると、希望は中身のない楽観主義ではなく、生の現実の中の恵みのたまものであることが分かります。どのお母さんもそうであるように、このかたはご自分の息子を見るたびに、その

将来のことを考えます。神殿でシメオンからかけられたことばは、確実にこのかたの心に刻まれました。

にこのかたの心に刻まれました。 「ご覧なさい。この子は、イスラエ ルの多くの人を倒したり立ち上がら せたりするためにと定められ、ま た、反対を受けるしるしとして定め られています。一あなた自身も剣で 心を刺し貫かれます| (ルカ2・ 34-35)。ですから十字架のもと で、無実のイエスが苦しみ死ぬのを 見ている間、すさまじい苦しみにあ りながらも、主に対する希望と信頼 を失うことなく、「はい」と言い続 けたのです。このようにして聖母 は、「人の子は必ず多くの苦しみを 受け、長老、祭司長、律法学者たち から排斥されて殺され、三日の後に 復活することになっている」(マル コ8・31)という告知をもって御子 がいっておられたことが、わたした ちのためになし遂げられることに協 働されたのです。そして、愛をもっ てささげられた激しい苦悩にさいな

まれる中で、わたしたちの母、希望 の母となられたのです。民間の信の中で、聖なるおとめマリス の中で、アラ・マリス)」と呼ん。 の星(ステラ・マリス)」ません。 のなは偶然ではあの中にある ではあの母はあり、ませんを、 がしたちを、神の母は助けに来を ださり、支えてくださり招い でださって がされるよう招い もっという、 確かな希望を表 ます。

同様のメッセージは、世界各地の多 くの聖母巡礼所で人々の心に焼きつ けられています。それら巡礼所は、 不安、苦しみ、希望を神の母にゆだ ねる、無数の巡礼者が目指す先で す。この聖年の間、巡礼所は、歓待 する聖所、希望を呼び起こす特別な 場となるはずです。ローマを訪れる 巡礼者が、市内の聖母巡礼所に立ち 寄って祈り、おとめマリアを崇敬 し、そのご保護を願うよう招きま す。わたしは、すべての人が、なか でも苦しむ人、虐げられている人 が、わが子を決して見捨てない母の 中でもっとも愛情深い母であるか た、聖なる神の民にとって「確かな 希望と慰めのしるし」「221であるか た、このかたの寄り添いを味わうは ずだと確信しています。

25 聖年に向けて、聖書に立ち戻り、 わたしたちに向けられたことばに耳 を傾けましょう。「それは、目指す 希望を持ち続けようとして世を逃れ て来たわたしたちが、……力強く励 まされるためです。……わたしたち がもっているこの希望は、魂にとっ て頼りになる、安定した錨のような ものであり、また、至聖所の垂れ幕 の内側に入って行くものなのです。 イエスは、わたしたちのために先駆 者としてそこへ入って行き、永遠に メルキゼデクと同じような大祭司と なられたのです」(ヘブライ6・ 18-20)。これは、わたしたちに与 えられた希望を決して失うことのな いよう、神のもとに避難所を見いだ すことによってその希望にしがみつ くようにとの、力強い招きです。

錨のイメージが雄弁に示唆するのは、人生の荒波にあっても、主イエスに身をゆだねれば手にできる、安定と安全です。嵐に飲まれることはありません。わたしたちは、キリストにおいて生きて、罪と恐れとするありません。ないできるようにするある希望に、しっかり根を下ろ

しているからです。この希望は、日常の充足や生活環境の改善よりはるかに重大で、わたしたちに試練を乗り越えさせ、招かれている目的地である天国のすばらしさを見失わずに歩むようにと背中を押してくれるものです。

ですから次の聖年は、ついえること のない希望、神への希望を際立たせ る聖なる年です。この聖年が、教会 と社会とに、人間どうしのかかわり に、国際関係に、すべての人の尊厳 の促進に、被造界の保護に、なくて はならない信頼を取り戻せるよう、 わたしたちを助けてくれますよう に。信じる者のあかしが、この世に おけるまことの希望のパン種とな り、新しい天と新しい地(二ペトロ 3・13参照) ―主の約束の実現へと 向かう、諸国民が正義と調和のうち に住まう場所一を告げるものとなり ますように、

教皇在位第12年、2024年5月9日

わたしたちの主イエス・キリストの 昇天の祭日

ローマ、サン・ジョヴァンニ・イ ン・ラテラノにて

- [1] カトリック中央協議会訳 (<u>https://www.cbcj.catholic.jp/</u> 2…)。
- [2] 聖アウグスティヌス「説教」(Sermo 198 augm., 2)。
- [3] 聖フランシスコ「兄弟なる太陽の賛歌」(Sources Franciscaines, n. 263.6.10 [石井健吾訳、『続・アシジの聖フランシスコの小さき花』 聖母の騎士社、1995年、197—198 頁])参照。
- [4] いつくしみの特別聖年大勅書『イエス・キリスト、父のいつくしみのみ顔(2015年4月11日)』1-3(Misericordiae vultus)参照。
- [5] 第二バチカン公会議『現代世界 憲章』4(Gaudium et spes)。
- [6] 教皇フランシスコ回勅『ラウ ダート・シーともに暮らす家を大切

- に(2015年5月24日)』50 (Laudato Si')。
- [7] 『カトリック教会のカテキズム』 2267(2018年8月1日付で発表され た改訂)参照。
- [8] 教皇フランシスコ回勅『ラウダート・シーともに暮らす家を大切に』49。
- [9] 教皇フランシスコ回勅『兄弟の皆さん(2020年10月3日)』262(Fratelli tutti)。
- [10] 教皇フランシスコ回勅『ラウダート・シーともに暮らす家を大切に351。
- [11] 「ニケア信条」(H. Denzinger A. Schönmetzer, Enchiridion Symbolorum definitionum et declarationum de rebus fidei et morum, n. 125 [A・ジンマーマン監修、浜寛五郎訳、『カトリック教会

文書資料集 増補改訂版』エンデルレ書店、1974年、27頁参照])。

[12] 同。

[13]「使徒信条」(H. Denzinger – A. Schönmetzer, Enchiridion Symbolorum definitionum et declarationum de rebus fidei et morum, n. 30 [前掲書10頁参照])。

[14] 『カトリック教会のカテキズム』 1817。

[15] 第二バチカン公会議『現代世界 憲章』21。

[16] 『ローマ・ミサ典礼書(2002年 規範版)』死者のための叙唱一。

[17] アウグスティヌス『告白』(Confessiones, X, 28 [『毎日の読書―「教会の祈り」読書 第二朗読』第四巻127頁])。

- [18] 教皇ベネディクト十六世回勅『希望による救い(2007年11月30日)』47(Spe salvi)。
- [19] 『カトリック教会のカテキズム』 1472。
- [20] 教皇パウロ六世、聖年前年の使徒的書簡『アポストロールム・リミナ(1974年5月23日)』II(Apostolorum limina)。
- [21]「グアダルペの聖母の出現物語」(Nican Mopohua, n. 119 [御聖体の宣教クララ修道会訳、1981年、10頁])。
- [22] 第二バチカン公会議『教会憲章』68(Lumen gentium)。

pdf | から自動的に生成されるドキュメント https://opusdei.org/ja-jp/article/

kyoukou-seinen2025-daichokusho/ (2025/12/11)